

G. H. Mead's Critique of Modern Science : For or against the development of the scientific method

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5146

G. H. ミードの近代科学批判

— 科学的方法の形成史から —

近藤 敏夫

1. ミードの受容と課題の設定

20世紀初頭以来、「科学」としての社会学は実証主義化の方向に進み、自然科学と同様の客観性を求めてきた（富永：63）。この方向に対する批判として1960年代から批判社会学、現象学的社会学、象徴的相互作用論などの主観的社会学が登場した。実証主義的な客観的社会学と反実証主義的な主観的社会学の対立を、いわゆる「規範的パラダイム対解釈的パラダイム」の問題とみなせば、学説史上ミードは解釈的パラダイムの古典とみなされている（Wilson：697）。社会学入門書におけるミード受容をみてもミードを反実証主義的な主観的社会学の古典とみなすものが多い。

本稿の主題である「近代科学批判」という観点は現象学や解釈学などの超越論哲学の観点と通じる面も多い。たしかに1970年代以降、社会学理論ではガーダマーとハーバーマスの解釈学論争を考慮した上で、実証主義と反実証主義の対立を克服しようとする動きがみられる（Giddens（1977））。この動きを解釈的パラダイムから解釈学的パラダイムへの脱皮とみなせば（山口：168）、ミードを解釈学的パラダイムの古典として読むことが可能かもしれない。しかし、本稿ではミードを解釈学的パラダイムには位置づけない。なぜならミードの近代科学批判には超越論的観点がないからである。

1980年代以降はミードを社会行動主義に位置づける傾向が優勢になりつつある。この方向にしたがうなら、ミードは自然科学の成果を積極的に取り入れ、科学的客観性を評価していたことになる。つまり従来の解釈的パラダイムとは正反対に、ミードが実証主義の文脈に位置づけられる。ミードを社会行動主義者とみなす立場は評価されるべきであろう。ただしわれわれは、行動主義を継承する際にミードが批判した点を忘れてはならない^(註1)。ミードは当時の心理学が精神科学の主観主義を抜け切れずにいる状況を批判していたが、同時に彼は自然科学の客観性をも批判していたのである。

近代科学の物心二元論に対する批判が繰り返しながらもかかわらず、依然として主観的方向と客観的方向の対立が問題とされ、どちらの方向にミードを位置づけるかがミードの学説史となっている（後藤：38-48）。しかし本稿では、『19世紀の思想動向』を典拠として近代科学の二元論が歩んだ軌跡を追い、ミードが自然科学の客観主義も精神科

学の主観主義もともに批判していたことを示したい。

ミードも強調しているように、現実の社会的、歴史的状況から独立した普遍的理論というものは存在しない (SW : 335)。ミードは自分の理論の歴史的背景を、西洋近代社会の進化と西洋近代思想の発展とに位置づけて述べている。われわれはミードが現代社会の特徴を解明する際に、なぜ近代以降の科学的方法の発展に注目するようになったのか、その歴史的、社会的背景を概観しておく必要がある。近代科学に対しては種々の反省がなされてきた。しかし、われわれは科学をただ批判するだけではなく、科学の成果を新たな観点から再構成する必要もあるだろう。本稿の目的は、『19世紀の思想動向』に沿って、近代の遺産である科学的方法をもう一度見直すことである。

2. 近代科学の二元論的図式

近代西洋の始まりを、大まかにルネッサンス、宗教改革の時期から、さらに啓蒙の時期に亙ってとれば、近代を特徴づけるものとして理性や合理性の概念が挙げられる。近代以降は中世カトリック教会の権威に代わって、人間の理性が社会の組織化原理として提唱され出す。また脱魔術化過程として世界のあらゆる領域で合理化過程が進展してくる。ミードは近代の特徴を諸個人の理性の働きの増大と合理的制度の形成のうちにみる (MT : 361-85)。ただし、近代以前にも合理性の概念は存在していた。合理性概念は中世カトリック教会の教義を経て近代ヨーロッパに持ち込まれたといっても過言ではない (MT : 1)。それゆえ中世と近代の違いは合理化過程の有無にあるのではなく、合理化過程の基盤が宗教から人間の理性へと変遷したことにある。

ただし、この人間の理性にも近代初期の段階では宗教的色彩が残存していた。というのも近代哲学では理性の普遍性や超越性が想定されているが、これは宗教的世界観を起源とする形而上学的仮定にすぎないからである。しかし、近代化が進行してくるとともに、人間の理性は神の意志の代替物とはみられなくなった。人間の理性は新たな観点から見直される必要があった。ミードは形而上学的思考に対するものとしての人間の理性を科学的知性と呼ぶ (PA : 622)。彼は西洋社会の合理化過程と理性的精神の発達を、科学的方法の発展によるものとして再構成する。「社会は自らが科学的方法に依存していることをより一層感じてきており、もし社会が知的に前進しようとするならば、科学的方法に依存し続けるであろう」 (MT : 361)。

『19世紀の思想動向』では、一方で科学的方法が諸個人の意識に内面化される過程について、他方で科学的方法が社会の領域すべてに制度化されてくる過程について述べられている。ただし、ルネッサンス期の科学は依然として宗教的色彩を帯びていた。自然科学の分野でガリレオが世界の法則性を前提したのは、神が世界を創造したと信じたからだった (MT : 5)。当時の科学者たちが自明視していた世界の合法則性は宗教的ドグマに基づく

ものであった (MT : 8)。ところが、自然科学が発達するにつれて、科学は宗教的ドグマからは徐々に解放されることになり、ルネッサンス末期になると、自然の世界は科学者が問題とし、人間の魂は教会が問題とするようになった (ibid)。ミードはこの物理的自然と精神との分離をホワイトヘッドにならって「自然の二分枝 (the bifurcation of nature)」と呼ぶ (PA : 357、IS : 106-7)。科学の人間性喪失はここから始まったとも言えるだろう。なぜなら近代科学の二元論は、事物を目的や価値から分離してしまい、そのように記述された事物の世界だけが客観的に真なる世界であると想定されたからである (SW : 295)。ミードの試みは近代科学の二元論を克服し、科学に目的や価値に関しても合理的な判断を下せる能力を付与することだった (SW : 255-256)。

ミードは科学的方法が目的や価値の問題を解決し、民主主義の実現に貢献し得ると確信していた (SW : 262-63)。ところが、ミードの生きた時代 (1863-1931) の科学は社会問題の解決に役立つどころか、第一次世界大戦を後押しするものだった (SW : 254)。ミードは科学が陥った誤りを指摘し、科学がもつ可能性を探るためにルネッサンス期以降の科学の発達を反省する必要がある。

近代科学は自然の二分枝過程に対応して、自然科学と精神科学に分かれて発達してきた。一般に科学と呼ばれたのは自然科学の方である。これに対して、精神科学の方はドイツ観念論の伝統に基づく哲学を意味した。ミードは自然科学の成果を評価しながらも、自然科学の見過ごした目的や価値の問題を、精神科学の成果によって補おうとしたのではないか。以下、ミードがルネッサンス期以降の自然の二分枝過程をどのように批判していたかを示してみたい。

3. 自然科学の発達と社会的背景

この節では「物理的自然」の問題を扱う自然科学を取り上げる。ミードは自然科学の方法として数学的分析と科学的実験を重視している。以下、まず数学的分析の特徴について述べ、つぎに科学的実験の特徴について述べる。

ルネッサンス期の数学的分析は宗教的な意味での世界の合法則性を前提とするものだった (MT : 5)。すなわち、世界を数学的に分析することができるのは、神があらかじめ世界を合法則的に創造したからだと考えられていた (MT : 6)。科学者の仕事とは、偉大な数学者である神が為したことを後から徐々に解明することだった (MT : 7)。この考え方は宗教的色彩が消えた近代科学においても、ドグマとして、つまり検証され得る仮説としてではなく、いわば証明され得ない最終的な仮定として残存することになった (MT : 7-8、277-8)。換言すれば、数学によって示されるのと同様の斉一性が自然にも備わっているはずであると仮定された。それゆえ、数学的分析が自然科学の最も有効な方法であると考えられたのである。この数学的分析は自然科学の機械論的方法の基礎であり、後の

産業革命期の科学技術の発達にとっては不可欠なものになった。

機械論的方法は古典力学の方法として発達した。自然科学には自然の世界を出来るだけ簡単な要素に分析する傾向があった (MT: 154)。物質は究極的な要素から成ると考えられており、そのような物質の質量と運動が古典力学の対象であった。そして17世紀末には、ニュートン (1642-1727) が質量と運動の関係を法則化し、数学的分析、特に微積分の助けをかりて古典力学の基礎を築いた (MT: 155、251)。

「mechanics (力学)」という言葉が「機械学」という意味を含んでいることから明らかなように、古典力学は16世紀以降の産業の機械化に対応した学問であった。そして、18世紀の産業革命期に機械化が進展してくると、新しい動力源が求められ、やがて蒸気機関が発明された。この蒸気機関がニュートン力学とは異なる熱力学の理論を生み出すことになった (MT: 156)。産業革命期には、蒸気機関がどれほどの力を生み出すか、機械がどれほどの仕事をするかを計測する必要があった。カルノー (1796-1832) は仕事量をエネルギー概念に置き換え、熱エネルギーと運動エネルギーの換算を可能にした (MT: 156、244)。こうして19世紀初頭には、新たにエネルギー保存の法則がニュートン力学の法則に加えられ、古典物理学の体系化が数式を用いてなされたのである (MT: 280)。

産業革命以降、西洋の人びとは機械論的方法を用いて物質を操作し、環境を支配するようになった (MT: 250)。ミードは科学による環境支配力の増加を、人間が環境に対して持つ自由の増大とみなした (ibid)。少々逆説的だが、目的や価値の問題を免れた自然科学が、産業革命を推進する原動力となり、社会的目標の形成に役立ったわけである。ミードはこの事態を科学のパラドックスと呼ぶ (MT: 250-251)。「実際、当時の機械論的科学は人間の行動を機械化したのではなく、むしろ自由を与えたのである」 (MT: 261)。

ミードはたしかに機械論的方法の働きを評価していたけれども、機械論的方法そのものを肯定的に評価しているわけではない。彼はただ、産業革命期においては、諸個人が環境支配の手段として機械論的方法を利用していたと言いたかったのだろう。産業革命の主体はあくまで人間だった。しかし、産業革命が成功した後も、はたして主体は人間であると言えるだろうか。科学は人間が用いる手段ではなくなり、人間の意志から独立してしまったのではないだろうか。現代ではもはや科学のパラドックスと名付けられた事態は起こらず、科学は環境と同様に人間をも物質のように扱い始めたのではないだろうか。つまり、人間が科学をではなく、科学が人間を手段として扱い始めたのではないだろうか。このような間に答え、その解決策を示すことが、20世紀初頭の哲学者や科学者の課題の一つであった。科学に目的や価値を取り戻すことが出来るかどうか、これがミードの問題であると言えるだろう (MT: 269-70、SW: 254-56)。この課題に答えるためには、単に機械論的な定義とは異なる科学の定義づけが必要になってくる。その新たな定義づけの可能性をミードは科学的実験に見出す。

ルネッサンス以降の自然科学には、数学的分析に加えて実験的方法が導入された (MT : 450)。例えばガリレオの理論は世界の合法則性を前提としていたが、彼は自分の理論を仮定として措定したのであり、観察による事実と一致する限りにおいて、その理論は認められることになった (MT : 267、450-51)。もし観察による事実と一致しなければ、仮説的な世界像は再構成されなければならないのである。この意味での科学はもはや絶対的に所与の法則なるものを確立しようとはしなくなった (MT : 267)。ただし、科学の扱う普遍は仮説的な普遍となったが、依然として世界には合法則性が備わっているものと考えられていた。

ミードは実験的方法がルネッサンス期にはまだ萌芽的状态にしかなく、18世紀の中頃から発達してくると考えていた (MT : 264)。19世紀末まで、自然科学は古典物理学に代表されるように、数学的分析に基づく機械論的方法が優位だった (MT : 260、265-6)。ところが実験的方法が発達するにつれ、数学的分析は仮説構成の手段でしかなくなった (MT : 354)。理論の妥当性は数学的分析に基づく演繹によって得られるのではなく、作業仮説が実際の経験によって検証されるかどうかにかかってきた (MT : 356)。ミードは実験科学が発達したおかげで、自然科学の法則からドグマ的色彩が薄れてきたと評価する (MT : 285)。

しかし近代科学は客観性追求の要請のもとに、自然の世界であれ社会的世界であれ、対象を第三者の立場から観察しようとした。数学的分析と科学的実験は手続きさえ厳密に守れば誰でも繰り返して使用可能な抽象的道具であり、その意味で第三者としての科学者が用いる言語になった。また数学的分析が可能となる背景には、世界を主観的意識と客観的事物に分離し、後者の事物が研究者の主観的意識とは独立に分析できるという想定があった。このような事物は温かみも、喜びも、なつかしさも伴わない抽象的事物である。当事者ではなく研究対象から距離のとれる第三者が、科学的実験によって抽象的事物を観察し、対象の客観的合法則性に接近することができると想定されたのである。

近代科学の客観性は以上のような二元論を前提にして成立していた。しかし、はたしてミードは客観的な斉一性、合法則性という意味での抽象的普遍を求めていたのだろうか。ミードは自然の合法則性をドグマとして批判したが、この観点が量子力学に代表される現代科学の観点と類似しているという指摘もある (Shalin (1991))。この解釈では、ミードが現代科学の成果をいち早く評価し、自らの理論に取り入れたことになる。現代科学に対するミードの評価は今後の検討課題であるが、現代科学も自然の二分岐を克服していない以上、ミードの近代科学批判は現代科学にもあてはまる面が多いものと思われる。ミードの科学批判は、数学的分析や科学的実験が事物の抽象化を押し進めたことに対して向けられていたのである。

4. 精神科学の伝統と自我概念

自然科学が対象外とした目的や価値の問題が精神科学では取り扱われてきた。そこでは宗教的価値に代わって、社会的価値や目的が諸個人の取るべき態度と関連させて問題とされた。こうして諸個人の自我が注目されるようになった。主観と客観を統一する過程としての自我概念は近代西洋に特有のものであり、歴史的、社会的背景から切り放して考えることは出来ない。ミードの自我論もその発想の多くを精神科学の伝統に負っている (Shalin (1984))。ミードは精神科学の伝統を形而上学や哲学としてではなく、社会科学の観点から批判し、現実の社会と個人を結び付けるものとして社会的自我の創発を重視した。以下、近代西洋における自我の発達を、科学的方法の内面化過程として再構成してみよう。

自然科学の分野ではルネッサンスを契機にして宗教的権威から開放されたわけだが、自然と分岐された精神の領域においては、まだ教会の権威が力が持っていた。しかし、ルネッサンス以降、特に経済の領域で諸個人が種々の可能性を実現してくるようになると、中世の封建的社会が崩れ、中世カトリック教会の恣意的な律方が拒否されるようになった (宗教改革)。さらに、社会の制度は人間の理性が反映したものであるべきだと主張されるようになった (啓蒙思想)。教会の権威からの解放が社会生活の面でも始まったのである。この動向に対応して必然的に起こった革命が、フランス革命を典型とする一連の市民革命である (MT: 12)。

市民革命期を代表する思想家にルソー (1712-78) とカント (1724-1804) がいる。一般にルソーは市民革命の理念を示したとされるが、ミードはルソーに加えてカントも「革命の哲学者」として高く評価していた (MT: 27)。ミードによれば、カント哲学はルソーの示した啓蒙の理念を一般化したものである (ibid)。またルソーやカントの思想は革命の指導理念になったことは事実だが、彼らがその指導理念を創り出したというよりも、むしろ彼らは当時の社会動向をより明確に定式化したのだと言った方がよいだろう。

ルネッサンス以降は神の意志に代わって人間の理性が意識に内面化されてきた。すなわち神が社会の法を与えるのではなく、人間の理性が合理的制度を形成すべきであると考えられるようになった。もちろん、この考え方は当時台頭しつつあった市民階級の発想である。市民とは、ルソーの用語を使えば、君主でもあり、かつ臣民でもある (MT: 16)。またカントの用語を使えば、市民とは法を与える者であるが、それが可能なのは市民が法に従う限りにおいてである (MT: 27)。ここに行為の主体でもあり客体でもある「自我」概念が生まれたと言えるだろう。ルソーやカントの為したことは、市民の取るべき態度をより普遍的に呈示したことである。当時の人々は、既に内包していた自らの市民としての態度を、ルソーやカントによって啓蒙されたのである。

問題は、人間が人間を治める根拠を何処に置くかである。ルソーは一般意志に、カントは定言命法にその根拠を置くが、一般意志も定言命法も、普遍的な真理として想定されて

いた。その理由は、両概念とも神の意志に代行するものとして呈示されたからであろう。しかし、ミードによれば、人間が人間を治めることが可能なのは、当事者達はそのコミュニティの意志に従うからであった (MT: 16)。ルソーやカントとの違いは、コミュニティの意志という概念が、絶対的な形式を備えておらず、社会的、歴史的に変化する点である^(註2)。ルソーにしてもカントにしても、このコミュニティの意志の担い手に当時の市民階級だけを想定していた。例えば、ルソーは一般意志を考察する際に、封建的な単なる「占有」とは区別される、法的根拠に基づいた私的な「所有」の権利を問題にするのである (MT: 17-8)。

ルソーやカントは革命の哲学者としての役割を担っていた。ルソーの役割は革命の原則を人々に広めることであり、カントの役割はその原則を思弁的に組織立てることだった (MT: 51)。しかし、人間の理性に基づくべき革命は、ナポレオンの独裁政治の出現とともに失敗し、続いて王政復古の時代がやってきた。ルソーやカントによって示された思想には、内的に不十分な点があったのではないだろうか。ミードはカントの哲学を批判的に検討する。

カントは世界の形式の源泉を人間の理性に見出した (MT: 27)。しかしカントは、形式と内容、現象と物自体、主観と客観などの二元論的図式を貫徹したために、不死、自由、神に関する問題を、人間には認識し得ない超越論的理念として想定せざるを得なかった (『純粹理性批判』)。なるほどカントの図式では、自由と義務の問題が定言命法として要請されてはいるけれども、解決されてはいないとミードは指摘する (MT: 49, 76-8)。ミードの批判は、おおよそ次のようにまとめられる。すなわち、カントは行為に要請される普遍的な理念を示したにしか過ぎず、現実の行為が特殊な性向によって生じていることを説明してはいない (MT: 119)。もしその特殊性と普遍性が一致するとすれば、それは永遠の世界においてであろう (ibid)。したがってカントの要請は、現実の世界には見出され得ないもの、すなわち魂の不死、意志の自由、神の存在を、超越論的理念として想定せざるを得なくなり、我々はアンチノミーに陥ってしまうのである (ibid)。カント哲学は宗教的世界観を道徳的理念として保持したままであった。

カントは現象と物自体を区別した上で、自然界の法則の認識根拠 (数学的な意味での自然科学の成立可能性) を明らかにすることは出来た。しかし、社会科学の問題に関しては、その根拠づけに成功したとは言えない (MT: 27-9)。もっともカントにしてみれば、経験的な社会科学の成立可能性を検討するつもりは最初からなく、道徳哲学が問題であったのだから、ミードの批判は的外れかもしれない (『実践理性批判』)。カントの「超越論的観念論」を「経験的社会科学」の文脈に位置づけて批判するという根本的な関心の食い違いがある訳だが、とにかくミードは、カントが社会科学の根拠づけに成功しなかった原因を基本的にはカントの二元論にあるとみなしていた (MT: 119)。ただしミードは、カ

ントの発想に二元論を克服する動的な契機がすでに含まれていることを評価した。その契機とは、二元論を統一する過程としての判断力である (MT : 44-5)。この判断を遂行するものとして、超越論的自我が目されるようになり、この意味でカントは後のロマンティズム哲学への道を準備したのである (MT : 45, 77-8)。

ロマンティズム期になると、市民革命の失敗を経験した人々は、理性だけに頼るのではなく、中世社会の制度をも省みるようになった (MT : 54)。なぜなら、市民的な自由や平等の理念だけで社会を組織化することが出来なかったからである (MT : 57)。この敗北の経験からロマンティズムが生まれた (ibid)。特にドイツでは、フランス革命末期のナポレオン遠征の結果、一旦は中世の封建制度が崩壊したものの、その反動としてナショナリズムが台頭し、中世の秩序が再び見直されるようになった (MT : 95-6)。ただし、過去を反省する個人は、市民革命を経験した後の理性的個人だった。ロマンティズムの特徴としてミードが重視するのは、人々が単に中世を述懐するのではなく、新しい個人、新しい自我として中世を反省するようになった点である (MT : 58, 147)。

ロマンティズム哲学では、カントのアンチノミーは主観と客観のアンチノミーとして定立され、自我はこの主観と客観を統一しながら不断に発達するものとして注目され始めた (MT : 50)。ミードによれば、カントの自我が超越論的主観として要請されていたのに対し、ロマンティズムの自我は自らの内に主観と客観の契機を含むものだった (MT : 78)。

ロマンティズムを代表するのはヘーゲル (1770-1831) である。ヘーゲルによれば、世界の形式自体が、自然界も歴史的社会的世界も含めて、主観と客観との弁証法的過程によって発展する (MT : 139-9)。つまり、弁証法的図式では、自我と世界は相対的に進化する過程である (MT : 139)。しかしロマンティズムの自我概念は、絶対的自我、もしくは絶対精神なるものを形而上学的に想定していた (MT : 124)。そして、諸個人はこの絶対的自我が限定的に現れたものであり、世界も絶対的自我の思念の現れであるということになった (MT : 139)。それゆえミードは、ロマンティズム哲学が依然として現実の自然や社会の進歩を説明しておらず、科学的成果を取り入れることに失敗していると批判する (MT : 143-4, PP : 161)。

ミードがロマンティズム哲学から受け継ぎ発展させた概念には、動的な自我概念の他に、歴史に対する見方もある。ロマンティズムは、市民革命の失敗を経験した後に、現在の社会の観点から過去の歴史を反省する運動である。この歴史性の自覚が社会の制度を研究する際に重要となってくる (MT : 148-9)。市民革命が「革命」と呼ばれたのは、中世の秩序を一掃し、それに取って代わって理性に基づく制度を置いたからである (MT : 149)。これに対して、歴史性を自覚したロマンティズムの観点からは、現在の制度は矛盾を含む過去の制度が再構成されたものであり、その意味で過去から「進化」してきたも

のになる (ibid)。ミードはカントを「革命の哲学者」と呼んだ (MT : 27)。ロマンティシズム期には「革命」の概念が歴史性の自覚を経て「進化」の概念に変わった (MT : 149)。ミードはカント哲学を「革命の哲学」と名付けたのに対して、ヘーゲル哲学を「進化の哲学」と名付けた (MT : 147)。

社会の制度は人間の理性によってそのつど与えられるものではなく、むしろ社会過程のなかで歴史的に形成されるものである。ロマンティシズム期の人々は、歴史的条件を考慮に入れた上で、現在の制度を批判し、制度がどのように再構成されなければならないかを見極めようとしていた (MT : 148)。しかし、ミードはロマンティシズム哲学の形而上学的想定を批判している。なぜなら、形而上学的想定がミードの求める社会制度の再構成を阻むことになるからである。

ヘーゲルの哲学では、社会制度の再構成の最終目的が絶対精神によって与えられている。しかも、この絶対精神は個々の自我には限定的にしか現れないので、絶対精神の目的を知るためには、個々の自我の観点は他の諸々の自我の観点によって補われる必要がある (MT : 144)。そこでヘーゲルは、個々の自我をすべて包括しているコミュニティのほうが個人よりも絶対的なものへ近づくことが可能であると想定し、具体的には国家が最高の知性形式を表象していると主張した (ibid)。この考え方がロマンティシズムの傾向の一つであるナショナリズムと結び付くと、国家自体が絶対精神と同一視され、個人は国家に服従すべきものになった (MT : 145)。こうしてヘーゲルの哲学はプロイセンの上から下への改革の指導理念を与えることになった (MT : 144)。またフランス革命後のウィーン体制下では、君主に肩代りされたナショナリズムがヨーロッパ諸国の支配体制であり、ロマンティシズムはその保守的傾向と結び付いていたとも言えるだろう。

以上のように、19世紀の知的状況においては、啓蒙や市民革命を経てロマンティシズムに至る伝統があった。この動向を特徴づけるものとして、目的論的方法を挙げることが出来るだろう。目的論の特徴は、達成すべき未来の目的が予め与えられている点である (SW : 251)。ヘーゲルの弁証法では、現実「理想」に向かって進化する (MT : 146)。人間社会の進化も弁証法の論理に従うものと考えられていた。すなわち人類や社会は未来において達成されるべき到達点に向かって進化しているのであり、進化の到達点は絶対精神によって示されていると考えられた (MT : 145)。個々の自我は過去を反省することによって現在の過ちを正し、絶対精神によって示される未来の目的を達成するよう行為しなければならなかった。

ミードが批判する点は、目的論的方法が超越論的精神を人類の到達目標として想定する点である。啓蒙思想ではルソーの一般意志やカントの定言命法が、ロマンティシズム哲学ではヘーゲルの絶対精神が想定されている。しかし超越論的精神という想定は、神の意志が姿を変えて人間の意識に内面化されたものであり、ルネッサンス以降の二元論的図式に

基づく形而上学的ドグマでしかない。

精神科学は目的論的方法に基づいて発達したと言えるだろう。それゆえ、精神科学には形而上学的仮定が残存することになる。その典型が歴史哲学を始めとする当時の歴史研究である。ミードは歴史研究から形而上学的仮定を捨象してしまおうと企てるわけであるが、その際、彼は実験科学の方法に依拠する。ミードは実際の歴史研究が形而上学的仮定を持ち出さずに為されていることを示し、実験的方法をより自覚的に用いることを提唱したように思える（PA：92-100、464-519）。

ただし、ミードの「実験」は近代科学の抽象的実験を意味してはいない。彼の実験や調査による観察は歴史的、社会的事実が持つ個性や具体性を重視するものであった。ミードは自然科学の抽象性であれ、精神科学の超越論性であれ、直接的経験のもつ具体性や個性を近代科学が捨象してしまったことを批判したのである。近代の実証主義的社会科学はコミュニティの生活を人口や職業の統計的データによって呈示し、諸個人の経験が持つ多様性は一般化された定式のなかで消失してしまった（SW：275-276）。また、観念論哲学の伝統に基づく社会科学は普遍的理性の基準によってコミュニティの進路を示してきた。しかしミードは、コミュニティの生活をそのコミュニティを構成する様々な個人の実際の生活によって呈示しようとした（ibid）。

近代西洋では自我意識の発達にともなって、様々な社会領域での革命や改革が行われ、社会は進歩してきたと言えるだろう。この自我と社会の相互関係がミードの中心テーマであり、彼の自我論の基本枠組の一つになっている。研究者であれ日常の行為者であれ、現実の社会に生きる人々は、実験的方法を意識化することによって、現代社会に要請される自我を獲得できるのではないだろうか^(注3)。ミードは超越論的自我概念に代えて、社会的な自我概念を模索したのである。

ミードはいかなる理論、いかなる論理であれ、その妥当性の根拠を超越論的観点にではなく具体的経験に求めた。「超越論的」方向に進むのか「具体的経験」に回帰するのか、これが今日の社会科学が選択を迫られる立場であろう。本稿に沿った形で現代の思想状況を分ければ、分析哲学、超越論哲学、プラグマティズムの三つがあげられるだろう。分析哲学を客観的パラダイムの代表、超越論哲学を（間）主観的パラダイムの代表とみなすことができる。両陣営とも二元論の解決を試みており、「超越論的論証」の問題が共通の課題として挙げられている。しかし、ローティの批判に見られるように、プラグマティズムのパラダイムは超越論的な方向に問題の支点を移すことはない（ローティ（1992〔1979〕）。この点でプラグマティズムは分析哲学と超越論哲学の両方に対峙し、近代科学の二元論を克服しようとしている。

5. 科学的方法と社会問題

ルネッサンス期から19世紀前半までの自然の二分岐過程を、自然科学と精神科学とに分け、それぞれ産業革命や市民革命などの西洋近代社会の進化の問題と関連させて考察してきた。では、ミードの生きた時代（19世紀後半から20世紀初頭）の社会問題と科学との関連は、いったいどのようなものだったのか。

ミードの生まれた頃（1863）のヨーロッパ諸国は、産業革命がほぼ成功し、自由主義の時代に入っていた。新興ブルジョアジーの台頭とともに旧勢力との対立が表面化し、君主に肩代りされたナショナリズムから、国民的自由主義への移行が進んできた。また産業革命以降に生まれた労働者階級が、社会主義の理念を掲げて新興ブルジョアジーと対立するようになっていた（MT：215-42）。国内の対立に加え、ヨーロッパ諸国では産業革命以後の資本主義経済の発達につれて国家間の利害が衝突し、抗争が続いていた。ミードがヨーロッパを遊学した頃（1888-91）には、ヨーロッパ諸国は帝国主義の時代に入っており、各国とも国内外に矛盾を抱えていた。アメリカ合衆国でも、南北戦争後に産業革命が成功し、資本主義国家として発展していたが、移民問題という形で矛盾が表面化していた。特にミードがデューイとともにやってきたシカゴでは、人種暴動が激化していた（Barry（1968））。以上のような問題に直面したミードは、はたしてどのような解決策を提示したのだろうか。

19世紀前半までは、社会問題解決のために指導理念を一つ掲げるだけで十分だったかもしれない。もっとも、そのような解決策は特定の利害と結び付いた理念を普遍化し、その理念を社会の全成員に押し付けるものであっただろう。ところがミードの生きた時代は、利害や価値の多元化が進み、その葛藤に決着をつけることが不可能になっていた。19世紀後半から20世紀初頭は、はたして科学が多元化した世界の問題を解決し得るか、そのための理論を提示できるかどうか問われた時期だと言える。ミードによれば、社会を組織体として把握し、その諸部分の機能を問う社会科学、特に社会学が登場したのはこの時期である（MT：373）。

当時の社会科学は社会的状況と同様に多元化しており、相対主義に陥っていた。しかし、相対主義では問題の解決に結び付かない。どのようにすれば相対主義を克服できるのか。精神科学の目的論的方法では、自らの目的や価値が至上のものとして想定されるために、競合する目的や価値を比較考慮し、多元化した世界の問題を解決することは原理的に不可能になってしまう。各々の精神科学が自らの目的や価値の正当性を主張するだけである。そこで、目的や価値をそれ自体は含まないとされた自然科学の方法に救済策を求める傾向が出てきた。

19世紀末には自然科学と精神科学の対立が問題とされていたが、この対立を解消する方法の一つとして実証主義の動向があげられる。実証主義は自然科学の進歩した方法を遅れ

た社会科学に適用し、社会科学にも客観性を獲得しようとした。実証主義的社会科学の特徴を、ミードにならって、「自然科学の方法と同様の仕方で行える社会の研究があるはずである」(MT: 462) という想定に置こう。この想定は、コント以降の実証主義的社会科学の精神であると思う。近代から現代にかけて、社会科学には形而上学的方法から科学的方法への発展が要請されたと言えるだろう。ミードは実証主義の考え方を捨象した上でなら、この発展を評価しているように思える (MT: 452-8)。

ミードが実証主義に対して抱く疑問は、科学的方法が価値から独立し得るか、また独立しても良いのかという問題に関してである。ミードは科学的方法が社会的価値の形成に貢献し得るのではないかと問うのである (SW: 252, 265-6)。社会的出来事を含めてすべての現象を究極的要素に分析し得るとする実証主義の想定自体が、ルネッサンス以降の自然の二分肢に捕われた形而上学的ドグマでしかなかった (MT: 463)。精神科学と同様に自然科学の発達も社会の動向と密接に関連したものである以上、自然科学も社会の利害や価値とは無関係ではあり得ない。しかし、それでもなお、科学技術の背景は社会的なものだが自然科学の方法自体は社会の利害や価値から自由であると主張されるかもしれない。そして、この実証主義的な想定に基づき、科学が機械論的方法を用いて多くの成果を上げてきたことも事実だろう。しかしながらミードは、価値を不問に付した科学が国家的、経済的、軍事的な帝国主義の出現を招き、その帝国主義に武器を与えてしまったことを憂慮した (SW: 254)。科学は社会的価値や目的の問題を少数者の手に委ね、所与の目的を実現するための手段を作り上げたに過ぎなかった。これに対してミードは、社会的価値や目的が競合する場合に、問題解決のために科学的方法を用いることが出来るかどうか、そのことを問題にしたのである (ibid)。

実証主義は社会科学に科学的方法を導入させ、経験的な社会科学を発展させたと言えるだろう (MT: 462)。この実証主義的社会科学の前提には、方法のレベルでは目的や価値から独立して研究を行うことが可能であるという信念がある。しかし、科学的方法は純粋に論理的な構造だけで形成されているものではない。科学的方法には個性的なものや社会的なものとの契機も含まれている。ミードは近代科学が抽象的普遍性を追い求めてきたことを批判したのである。

自然科学の機械論的方法が自覚することのなかった個性、歴史性、社会性の契機を、精神科学の目的論的方法の成果で補い、社会問題解決の方法としての科学の再構成を目指すこと、これがミードの問題だったのではないだろうか。そして、機械論的方法と目的論的方法の橋渡しの役割を担うのが、19世紀後半から優勢になってきた実験的方法であった。

6. 実験的方法と社会行動主義

『19世紀の思想動向』でミードは近代科学の方法を評価していたとする説もあるが

(Moore (1936))、ミード自身は数学的分析を用いたり、科学的実験を行うことはなかった。ミードは「あるがままの世界“the world that is there”」に起こる「直接的経験“immediate experience”」にリアリティの基盤を求めている。

社会行動主義にしたがえば、複数の人びとに観察可能な事実とは、科学的実験によって得られる生理学的に分析された抽象的事実を指すのではない。ミードが重視したのは「あるがままの世界」で共有される「直接的経験」である (PA : p. 31)。つまり、当該世界に生きる人びとがその世界で生起する出来事を直接的経験として共有できれば、その世界の客観性が保証されるのである。

『精神、自我、社会』や「1927年の社会心理学講義」では生理学の成果が取り上げられるが、数学的分析やワトソン流の実験は行われぬ (MS, IS)。また、『行為の哲学』や『現在の哲学』で相対性理論が論じられるときも、数式が用いられたり精密機器による実験がなされたりはしない (PA, PP)。ミードは当時の最先端の科学的成果である進化論的生物学と相対性理論を抽象的に要約して紹介するのではなく、人びとの日常生活にみられる具体的経験に引き戻して説明した。例えば、鳥の鳴声、犬の喧嘩、ボクシングのフェイント、有声身振りによる会話、物を押すときの抵抗感、列車の乗客がプラットホームに対してもつ移動感などがミードの説明にはよく出てくるが、どれをとってみても、数学的分析や科学的実験によって得られた抽象的事実ではない。

ミードは近代科学の二元論の克服を社会行動主義の観点から行なった。社会行動主義は自然科学的な行動主義でも、精神科学の思弁的心理学でもない。ミードは意識と世界が分離する以前の直接的経験に注目するが、この発想はジェームズやデューイの発想を継承したものである (MT : 392)。ミードは自然科学と社会科学の統合を目指していたが (Joas : 165)、彼にとっては自然科学と社会科学の区別および社会科学の遅れが問題ではなかった。ミードは、自然科学であれ社会科学であれ、近代科学が人間の活動領域すべてに抽象的に適用されてきたことを問題にした。そして彼は近代科学の基本概念を「あるがままの世界」における「直接的経験」に引き戻して検討し見直そうとしたのである。

ミードの自我論では、プレイやゲーム段階の子供の行動が他者の態度取得の例として取り上げられるが、ままごと遊びや野球ゲームなどの例に見られるように、それらの例には「あるがままの世界」で得られる「直接的経験」がそのまま用いられている。社会行動主義で得られるデータは、人びとの日常感覚で納得できるデータである。ミードの発想が反実証主義的社会学に応用され、モノグラフ研究の理論的基盤になっているのは、他者の行動を科学的に観察したり分析したりせずに、諸個人のパースペクティブから社会を把握しようとしたからであろう。

ミードは諸個人のパースペクティブが持つリアリティを認め、社会がそれらのパースペクティブの組織化されたものであるとみなしていた (MT : 415)。ミードはそのような社

会を解明するために、社会行動主義の方法を構想しようとしたのであるが、今後の課題として『行為の哲学』や『現在の哲学』を典拠として社会行動主義とプラグマティズムの関係を解明する必要があるだろう。

注

- 1) ミードはワトソンの行動主義が意識を主観的なものとして切り捨てたことを批判する。ミードの社会行動主義はジェームズやデューイのプラグマティズムの発想を取り入れた上で意識や概念を対象の世界に取り戻そうとするものである (MT : 390-404)。精神科学は思弁的に人間の本性と社会の本性を問題にしたが、社会行動主義は実際の人びとの反応をデータとする。ワトソンに代表される「科学的心理学者」が意識を退けたうえで観察可能な客観的データを扱ったのに対して (MT : 390)、社会行動主義は人びとの直接的経験、すなわちコミュニティで生活する個人個人の行動そのものをデータにする。ミードの社会行動主義はジェームズとデューイから受け継いだプラグマティズムの意識や経験の考え方に、ワトソンの行動主義とホワイトヘッドの相対主義を批判的に加えたものであるといえよう。
- 2) ミードは市民革命の成果として立憲政治の仕組みを挙げる (MT : 361)。憲法の理念は普遍的なものとして変更されるべきものではなかったが、現実社会の諸制度は状況に応じて変更できるものになった。つまり憲法に制度を改正する項目が盛り込まれたのである。ミードは市民革命が「革命の過程」を社会の秩序に取り入れ、もはや絶対的な普遍を想定しなくなったことを評価する (ibid)。
- 3) 実験的方法の原型として、トライアル・アンド・エラーの問題解決法が挙げられる。この方法によれば、人類を含めて生命体は問題に直面した際に、試行錯誤を繰り返しながら当該問題を解決し、より高次元の段階へと進むことが出来る (MT : 365)。実験科学の仮説、検証の過程は、根本的にはこのトライアル・アンド・エラーの問題解決法を意識化したものである (SW : 334, 365, 367)。そしてミードの問題設定には、このプラグマティズムの考え方が影響を及ぼすことになる。すなわちミードは「発達」や「進化」の概念を重視し、また現実の行為を遂行する諸個人の自我を分析の焦点に据えたのである。
- 4) 諸個人の試行錯誤の努力によって社会は進歩する、という社会進化論的な個人主義が、当時のアメリカに蔓延していた (ホフスタター (1955 [1973])). ミードもまた例外ではないだろう。ここにミードの理論が持つ時代の制約性がある。問題は、彼の進化論が現代社会にも適用できる普遍性を含んでいるかどうかである。もしミードの進化論に普遍性があるとするれば、それは彼の問題設定の仕方と、その問題設定の仕方を基礎づけているプラグマティズムの観点であると思う。今後の課題は、プラグマティズムと進化論との関係を検討することである。

参 考 文 献

- George Herbert Meadの文献 (文献文頭の〔 〕内は略号)
- 〔PP〕… *The Philosophy of the Present*, Univ. of Chicago Pr., 1932.
- 〔MS〕… *Mind, Self, and Society*, Univ. of Chicago Pr., 1934.
- 〔MT〕… *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, Univ. of Chicago Pr., 1936.
- 〔PA〕… *The Philosophy of the Act*, Univ. of Chicago Pr., 1938.
- 〔SW〕… *Selected Writings*, Univ. of Chicago Pr., 1964.
- 〔IS〕… *The Individual and the Social Self: Unpublished Works of George Herbert Mead*, Univ. of Chicago Pr., 1982.

その他の文献

- Barry, Robert M. 1968, "A Man and a City: G.H.Mead in Chicago" *American Philosophy and the Future*, Novak, M. (ed.) pp. 173-92. New York
- 船津 衛 1989, 『ミード自我論の研究』、恒星社厚生閣
- 後藤将之 1987, 『ジョージ・ハーバード・ミード』、弘文堂
- ホフスタター, R. 1973 [1955], 『アメリカの社会進化思想』研究社
- Giddens, Al, 1977, *Studies in Social and Phlitical Theory* Basic Books Inc., Publishers New York
- Joas, H., 1980, *Praktische Intersubjektivität: Die Entwicklung des Werkes von George Herbert Mead*, Suhrkamp Verlag.
- Moore, Merritt H. 1936, "Introduction", in: Mead, G.H., *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, Univ. of Chicago Press, pp. xi-xxxvii
- Natanson, Maurice. 1956, *The Social Dynamics of G.H. Mead*, Washington.
- Reck, Andrew. 1963, "The Philosophy of G.H. Mead", *Tulane Studies in philosophy* 12, pp. 5-51
- 1964, "Introduction", in: Mead. G.H., *Selected Writings*. Univ. of Chicago Press, pp. xiii-lxii
- ローティ, R., 1992 [1979], 「超越論的論証・自己関係・プラグマティズム」『超越論哲学と分析哲学』 pp. 23-67, 産業図書
- Shalin, Dmitri N. 1984, "The Romantic Antecedents of Meadian Social Psychology", *Symbolic Interaction* 7 No.1, pp. 43-65
- 1991, "The Pragmatic Origins of Symbolic Interactionism and the Crisis of Classical Science", *Studies in Symbolic Interaction* vol. 12, pp. 223-251
- Strauss, Anselm. 1964, "Introduction", in: Anselm Strauss (ed.), *George Herbert Mead on Social Psychology*, Univ. of Chicago Press, pp. vii-xxv
- 富永健一 1983, 「社会変動研究における実証主義と理念主義 — 社会学における科学理論的問題 —」『思想』No.712, pp. 443-68
- Whitehead, A.N. 1920, *The Concept of Nature*, Cambridge Univ. Press
- 山口節郎 1982 『社会と意味 — メタ社会学的アプローチ —』、勁草書房